

山びこ通信

山の学校12周年
LVDVS COLLINVS

冬
学期号

しぜん₂ イタリア語₁₂ ラテン語₁₄ ウェブプログラミング ロシア語₁₃
 歴史 ギリシャ語₁₅ かが₃ ユークリッド幾何 フランス語₁₃ 数学₉
 ことば₅₋₇ つくる₄ 漢文 かず₇ ドイツ語 イベント 将棋道場₁₈ 英語_{7,9}
 ロボット工作₁₀ 山の学校ゼミ(社会₁₀/数学₁₀/調査研究₇/法律/経済₁₁/生活と文化/倫理₇)

時代の扉を開く鍵 —草の根の教養教育と ラテン語と

山の学校代表 山下 太郎

山の学校は4月で開校12周年を迎えます。当初4コマだったクラスの数は現在40コマを越え、会員数も100名ほどになりました。小学生から高校生の部に関しては、その当時の私が幸せを感じたような時間がそれぞれのクラスやイベントの中で流れていますし、一般クラスの活気に満ちた取り組みは、一昔前の大学教養部の賑わいを思わせます。今後とも講師一同力を合わせ、学校教育の補完的役割、また、草の根の教養教育を続けていきたいと存じます。

教養教育という思い出すことがあります。以前勤めていた大学で、年に一度フランス人の先生(ジュリー・ブロック先生)と一緒に合同の授業をすることがありました。対象はデザインや建築を学ぶ新入生200人ほどです。授業の中でキケローの名を知っているかと尋ねたことがあるのですが、誰も手を挙げませんでした。これを見てブロック先生は驚かれました。「フランスだと小学生でも知っています」とのこと。これには学生たちがびっくり。緊張して手が上がらなかったのではなく、続いて「ファールブルの名は？」と聞くとほぼ全員が手を挙げたのでした。これにまたブロック先生がびっくり。

たしかにシェイクスピアやゲーテなら話は違ったかもしれませんが、しかし、これらの作家が敬愛してやまないギリシャ、ローマの古典(西洋古典)はどうでしょうか。悲しいかな、日本の学校教育ではほとんど何も紹介されないままです。それで何が困るのか?という人が大半だと思われそうですが、私は、それがために日本の教養教育の取り組み——本来西洋古典に源流を持

つもの——は頓挫した(させられた)のだと考えます。キケローといえば、Ipse dixit.(子曰わく)という表現が真っ先に浮かびます。彼によると、ピタゴラスの弟子たちは論拠を問われると、「だって、先生がそういった(ipse dixit)のだから(正しに決まっている)」と答えるしかできませんでした。もちろんそれではだめなので、「議論を行うさいには、権威よりも理論の説得力こそ求められるべきである」というのがキケローの主張でした。何気ない言葉のようですが、ipse dixit. に込められたキケローの批判精神がその後のヨーロッパ精神の形成に果たした役割の大きさは、いくら強調してもしすぎることはありません。(和魂洋才といいますが、キケローは間違いなく洋魂を体現する巨人の一人です)。

翻って現代の日本社会はどうでしょうか。「～がいったのだから正しに決まっている」と無意識のうちに思い込むことがないか、どうか。個人差があることは当然ですが、日本人は全体としてみればやはり権威を盲信しやすい国民だといわざるをえません。これは民主主義にとって危険なことであり、必要なのは良質な教育だということになるのですが、その教育の現場においてもっとも幅をきかせるのが「正解」という権威であるとすれば、私たちはいったいどこに救いを求めればよいか、となります。

儒学の影響は小さくないのでしょうか。『論語』では孔子の言葉を引用する際、「子曰わく」で始めます。日本の社会において、「子曰わく」という言葉が発せられたら——「教科書にはこう書いてある」、等——、受け取る側は、けっして疑義を差し挟んではいけないかのようです。「子」とは何か。権威と名の付くものすべてがそうです。社会には「子曰わく」と唱えることで守るべき大切なものはたしかにあるはずですが、これからの時代はそこで思考を止めてはいけません。沈黙は金なり、されど批判もまた金なり。要はバランスです。

キケローの思想がフーマニタースの学(人間の学=教養教育)として、2000年以上にわたり <▶巻末へ>

A(火曜)クラスでは、寒い冬も森の中を駆け回って過ごしています。幾度も繰り返した、鬼ごっこや隠れんぼなどの「遊び」。何が皆をそれに駆り立てるのか、私も全力で皆を追いかけたり隠れたりしながら、注意深くクラスの行方を見守るうち、「冬の森の中で行うとき、それらは『特別な遊び』になるのだ」という実感が募っていきました。

木立の隙間を縫うように駆け抜けたり、枯葉を踏み足音に気をつけながら木陰に息を潜めたり、物音や気配に全神経を集中させたり。プレイエリアが広すぎると、かえって面白くないということも皆自身が納得し、「あの辺からここまで」という絶好の場所と範囲がやがて定まりました。「気配を感じ合える距離」です。そうした静動入り混じった時間の中で、樹の実や鹿の糞を発見したり、刺のある植物の生えている場所が分かったり、漂ってきた霧の香りを胸いっぱい吸い込んだり…。辺りを夕闇が包むようになると、感覚は一層研ぎ澄まされ、皆の距離も「きゅっ」と縮まります。大切な何かを知らずうち、体中で吸収しているように思います。



B(木曜)クラスでは、森の中で拾った材料を使った工作が続いています。Mちゃんが作り始めたドールハウス、後半からは1年生Sちゃんが引き継ぎ、小鳥やハリネズミが集う「いきもの・どうぶつのいえ」として完成しました！Mちゃんは続いて別の「丸太小屋」を一人で作り上げました。男子3人が協力して作っていた「将棋セット」も駒が全て揃い、完成しました！その後も、各自が剣や小動物や将棋の駒(本物を模した形)などを作っていました。どれも苦心して丹念に作り上げた宝物です。無心にのこぎりを引き、木の皮を削っている皆の横顔、眼差しを見る限り、そうした時間の意味を疑う余地は無いと、はっきり感じられます。

Aクラスの「隊長」ことH君(6年)も今学期で卒業です。冬学期後半は、H君を主体に皆で思い出に残ることをしたい、そう考えていた矢先、教室に来るなりK君が発してくれた言葉は全く同じものでした。偶然にもその日、隊長は風邪でお休み。果たして秘密の作戦会議が行われたのです。結果としては、「皆で焚き火を囲みたい」という、例年と変わらぬ意見で一致したのですが、釘を刺したのは、「丁寧に、心して作り上げる」ことです。ただ火が燃えれば焚き火、というのではありません。昨年度、釘えて何のヒントも無しに、焚き火の練習をしてもらったときのことを思い返してもらいました。その時はなかなか火種が育たず、「火が消えてはマッチを擦る」を繰り返し、焚き木の用意も不十分でした。とうとうマッチ箱も空っぽに。これでは誰も冬の山で生き残れません。冗談ではなく、本気で皆にそう伝えます。

今回は、焚き木集めの段階から、丁寧に、心して、立派な束を作ることを目標に(そして「H君に『皆だけでこれだけ集められたよ!』と言って驚かそう」を合言葉に)頑張りました。

Bクラスの焚き木集めも同様に導きます。導入としては、樹医の山野忠彦さんが、若一神社の樹齢800年になる楠の木を治療した時のエピソードを紹介しました。道路拡張工事のため根を傷つけられて弱っていた楠の木。その時木を切ろうとした人、手入れをしようとした人が、次々と不幸に見舞われたため「平清盛の祟り」「京都が一番恐ろしい木」と言われていたことを、治療を終えた後に知らされた山野さん。自分が何とも無かったのは、いつも「…絶対に助けてやるからな。痛いかもしれないが、しばらくの辛抱だ」と言い聞かせながら治療にあたるからかも知れない。危害を加えようとする人か、助けてくれる人か、木にはそれがわかるのだ、と。「本当かなあ?」と笑う子も、神妙な表情で聞き入る子もいましたが、こうして皆が工作を楽しめること、焚き火ができることは、森の恵みのお蔭です。その事を確かめた上で、宝探しをするような気持ちで木枝を拾い集めました。

果たして森の神様、火の神様に認めてもらえるような、よい火を囲めるのでしょうか。ちなみに、マッチは一人2本までしか擦れないという厳正なルールです(笑)。これからも、一期一会の仲間同士の対話を、自然の様々な「先生たち」との対話を、「しぜんクラス」の大切なテーマにしていきたいです。



予てからリクエストのあった、「紙粘土」の課題に冬学期は取り組んでいます。時間をたっぷり使い、みんな思い思いの造形を楽しんでいるようです。まず伝えた最小限のヒントは、粘土をよく練ってから使い、継ぎ足すときはしっかりと圧着すること、大きな作品や自立の難しい作品には、骨組みとなる芯材（針金やペットボトル等）を入れる方法や、台座に固定する方法があることです。水加減の注意などは様子を見つつ。とにかく「作ってみようと思ったものを目指す」「方法を自分で考える」ことが大事です。乾いたらぼろっと部品がとれてしまったり、ヒビが入っていたり、一筋縄では行かない粘土の振る舞いも経験しながら、一步一步進んでいきます。一方では、秋学期からの流れで、各々が自分で設定した課題に取り組む時間もあります。粘土も自由制作も、大変多様な展開をしており、そのことを嬉しく思います。その様子を、写真とともに御覧下さい。



絵本に、漫画に、貼り絵…。秋学期後半から自由制作を続けてきました。

粘土作品では、6年のH君、Sちゃんが、それぞれ石や針金を芯に使い、とても繊細で、バランスを取るのが難しい形に挑戦しています。作品がうまく形になることを心から応援し、願っています。しかし何より、試行錯誤の困難から得られるであろう多くの「気づき」こそが宝です。



Bクラスでも、細々したものを次々作る人、ひと塊の作品を積み上げる人、世界観は様々です。同じく6年のIちゃんも、試行錯誤しながら、作品の構想を柔軟に変えていったようです。6年間の集大成に相応しい、重量感のある作品が出来つつあります。



2014年度で「かいがクラス」は6年目を迎え、スタート当初から通い続けてくれている6年生たちとも一旦お別れです。「一旦」と言うのは、これからも互いの活動（あらゆる形や意味においての）を讃え合うことがあるであろう「同志」だと皆さんのことを勝手ながらに思っているからです。勿論、これまでクラスに参加してくれた全ての生徒に対して同じ気持です。（山の学校の講師・会員の全員は、学びを楽しみ讃え合う、言わば「学びの同志」なのかも知れません。）生徒の皆さん、そして、これまで見守り支えて下さった全ての方へ、感謝の気持ちで一杯です。

上記を含めたこの一年間の作品は、第6回「かいがクラス作品展」（2015年3/20～22 予定）で展示致します。どうぞご高覧下さい！（詳細は別紙ご案内またはホームページを御覧下さい。）



低学年のAクラスは、冬学期の最初に「弓矢作り」をしました。今はタイヤのある工作に取り組んでいます。模型的なものが中心だったところに、「飛ぶ」「回る」という動きを取り入れると、どんなものが出てくるだろうかと楽しみに考えています。材料はダンボールだったり、空き箱だったりします。そこでの自由度がこのクラスの売りです。



高学年のBクラスでは、冬学期の最初にひねもすで戦車を作りました。今はモーターで動く、ミニホバークラフトを製作中です。こちらは、空気を取り込むローターをはじめ、極力一つ一つの部品を手作業で作ることに挑戦しています。その分時間がかかりますが、既製品にはない「中身が見える」楽しみ方をしています。完成が待ち遠しいです。



ここで一年を振り返ってみると、A、Bクラスどちらも、生徒たちの熱いモチベーションによって支えられてきました。特に、低学年の生徒は、その日は「面白かった！また今日のやつを作りたい！」と、思いの丈を打ち明けて帰って行ってくれるのですが、次回会うと、それがころっと変わっていることがあります。二週間に一回の授業なので致し方ないことだと思います。またこちらが用意しているものと最初から違うものを「作りたい！」と言う時もあります。そういう時には、よくよく材料と相談して、「なら、こういうのができそう」と発想を切り替えた時に、彼らの満足度は高まります。そのように、何を作ろうかまでこちらと意見がぶつかることもありました。今のところは何とか相克し、いい達成感を積み重ねていくことができたと思います。笑顔と真剣さと。その両方を持って次の学年に進んでほしいと思います。



その都度の様子は、山の学校のウェブログになるべく毎回、写真をアップしています。どうぞご覧ください。



A クラスでは、一年を通して百人一首を暗唱してきました。この原稿を書いている頃には十七首目となりました。冬学期の終わりには二十首を少し越えているあたりでしょうか、それで歌のおよそ五分の一に触れたこととなります。その間に生徒も、最初は一人のところから、川の流れるように集まって、いつしか五人になっていました。

歌の馴染みのつけ方は人それぞれですが、「一首これが好き！」という歌があることが、とびきり大事なことだと思います。昨年12月のイベントで、かるた大会をしました。その時も、「札が取れてから好きになった」という生徒が何人かいました。それも嬉しいことでした。

古今和歌集の仮名序に、歌は「鬼神をもあはれと思はせ」る、とあります。その歌の一つでも胸に持つことは、きっとこれからのお守りとなるでしょう。五七五七七の歌の形式は、異国の文化に範を取ってきた日本人が、いかにして真心を表現できるかと思って磨いてきた「固有の器」です。そうした文化背景に身を置きながら、自身もまた固有であることに胸を張る気持ちは、人をも同じように固有であると認めるための「もと」です。いつ、どこへ行っても、それは変わらないだろうと思います。

創作では、俳句作りが特に男の子を中心に盛り上がりました。これはBクラスとは違う特徴で、Aクラスの方が「書く」ということに対して意欲的でした。俳句帳は、お家で新しいファイルに移してもらったり、句紙を紅葉や花型に切ってもらった生徒も出てきました。そのように大人の介添えで大事にされた出来事は、結局は何になるかと言えば、その生徒の真心として根付くのだと思います。それは何につながっているかが分からないからこそ、大事だと思います。先に述べた歌の一首の重さと同じく、ぜひ、そうした自分経由の古典もさりげなく大事にしていってください。

本読みでは、『火よう日のごちそうはひきがえる』（E. エリクソン作、佐藤涼子訳、評論社）を読んでいます。あと二回ぐらいで読み終わります。その後は、また昔話をいくつか読みたいと思います。

B クラスでは、冬学期は、諸子百家の章句を暗唱してきました。春と秋に紹介した『孫子』と合わせて、十四句ほど覚えめました。このクラスの特徴で、四人が四人とも知りたがり屋の元気な男の子ばかりだったので、ここはひとつ硬派に「寺子屋風」で行こうと思立ちました。彼らが素読に最後までついてきたことを称揚したいと思います。

「吾十有五にして学に志す、三十にして立つ、四十にして惑わず…」など、もちろん短いと、サビの部分に限定される憾みがあります。それをやむを得ずとしながらも、単に有名だからというのではなく、繰り返し歌い調子で覚えられそうなものを選んできました。一方、「すなわち」や、「ゆえにじす、と」、「もってやむべからず、と」のような、書下し文特有の言い回しは、一年生には当然のように難しくあります。けれども、時にかっこよく聞こえることもあって、ずっと入ったものはなかなか抜けにくいこともあります。やはりこの時期に憶えたものは自信になります。

しかしながら一方では、それを忘れてしまってもいいようにさえ思います（ただし思い出す時にはきつとすぐに思い出せると思います）。というのも、私が眼中とするのは、「命ながければ恥多し」や「出藍の誉れ」といった言葉には「元となった原文がある」という事実の方だからです。その事実に触れておくことで、将来、ことわざのような知恵の塊に、歴史を感じ、無味乾燥なものとしてもったいない覚え方をするのではなく、むしろ竹馬の友にすることを私は期待しています。

残りの時間では、絵本をよく読みました。先にも書きましたが、Bクラスでは「書く」ということに、まだ幾分遠慮や抵抗があるらしく、その分の時間をじっくり読むことに振り分けて、「お話の時間」として味わっています。待つことだと思います。Bクラスの方が、幼稚園の時期に読みそうな絵本に対する人気が高いです。こうしたバランスをむしろ、すこぶる面白く見えています。

秋学期おわりから冬学期にかけ、6年生のIちゃん、S君、私の3人で、「140句」近い俳句を作りました。1回のクラスで最高54句！後になってその数に驚きましたが、句の数よりむしろ、「3人で」というのがミソで、「五・七・五を3人で分担して一句を作る」、言わば「最小限の連歌」というような遊びでした。「上五（初句）」を書いた短冊を次の人に渡し、受け取った人が「中七」を続け、三人目が締めめの「下五」を書き、

裏返しにして机の真ん中に重ねていく…。時々笑ったり、唸ったりしながら、三人の無言の対話がぐるぐると同時進行で回転していきます。(6年生二人の勢いがすごいので、私は途中から受けるのが精一杯で、初句を書く余裕もないほどでした。これまで経験したことのない新鮮な疾走感を伴う対話に、正直私は楽しすぎて、自分の頬が終始緩んでいることに気が付きました。)

この遊びにはもう一つの仕掛けがありました。「百人一首」の中に使われている言葉を予め三人で手分けして抜き出し作っておいた「言葉のおみくじ」を使うのです(重複は気にせず、164語が集まりました)。どうしても句を思いつかない時や、偶然性を楽しみたい時、気まぐれにこの「おみくじ」を引いてよい、ただし引いた言葉は絶対使わなければならない、というルールです。また、おみくじ作りの過程では、「春日」「山鳥」「露」「波」など、自然に関する言葉の数々や、「恋」「忍ぶ」「涙」「別れ」などの言葉も目につき、様々な語彙を発見してくれたのではないのでしょうか。

このようにして、古の歌人たちの語彙を借りながら、また、友達との対話により言葉を紡ぎながら生まれた俳句たちを、次のクラスで読み上げながら、「なるほど!(そう繋げるか…!)」「あの句がいいね!」「私はあれが好き!」などと振り返りました。ほんの一部ですが、その作例を文末にご紹介致します。

また、同じ要領で、短冊ではなく、何行も続くノートを延々と回すことで、七五調を意識したもっと長い自由詩を作る試みもしました。こちらも面白いものが出来つつあるので、後日ブログで紹介できればと思います。

こうした言葉遊び自体もまた、クラスでの対話から湧いてきたものでした。元々、感じたまま素直に言葉を綴ることが得意な二人なのですが、屋外に出て自然と向き合うだけではマンネリ化してしまい、何かもっと引き出す工夫が必要だと感じるようになりました。

そこで先述の言葉遊びに先立ち、ある日こんな課題を出してみました。「今日はこれから、『何もしない』ということをしてもらいます。ただし、屋外に居て下さい。園庭のどこにいてもよいです。何か必要があればいつでも来てください。」そう伝え、園庭からほど近い園舎で待機していました。「何もしなくてよい」と言われ、不思議そうに顔を見合わせて笑うと、二人は石段を上っていきます。

クラスも残り20分足らずの頃合いで、園庭の様子を見に行き、私は二人に記入用紙と鉛筆を渡しました。

「Q.1. この時間、何もしていませんでしたか?それとも、何かしていましたか?」

「Q.2. (「していた」と答えた人へ) どこで、どんなことをしていましたか?何を考えていましたか?」

「何かしていた」二人は、「滑り台を滑って懐かしいと思った」「ジャングルジムの上から空を眺めていた」「芝生の上に寝っ転がっていた」「先生は、どうしてこんなことを言ったんだろう?と思った」など、色々と教えてくれました。クラスの終了時刻がきてしまいましたが、本当はもっともっとあったのではないかと思います。(私はたとえば、二人が何をしているのかなあと想像しながら、一緒に過ごしたいのをじっと我慢しつつ、質問を考えていました。)この課題がどういった意味を持つかは、皆様のご想像に委ねたいと思いますが、二人に「気負わずに過ごす時間」の感覚を認識して欲しかったというのが一つです。

「俳句遊び」は一旦休止し、最近ではお題を出し合って「謎掛け」をしています。これは、物事の性質を深く知ったり、関係性を発見するのに役立ちます。今後、アナグラムづくりや、言葉のもつ「語感」を意識する遊びも予定しています。

このようにして、自分ひとりだけでは出てこない語彙や、友達の発想に沢山触れたあと、冬学期の最後には再び一人での詩作に戻ってみようと思います。自然と、他者と、自分自身と向き合う中で、「自分の言葉」を見出す喜び。連想を楽しみ、気負いなく言葉を連ねていく自由。そこに立ち上がってくるイメージの面白さ。そうしたことが、ことばへの親しみに少しでも繋がってくればと願っています。

・俳句の作例

(太字が「おみくじワード」です。)



・S→K→I 作

光見る 未来に向かう 青年よ
 香りたつ 芝草の上 ねころびたい
 命令だ そうはいえども 山風は吹く
 待ち続け あらしが去って 川遊び
 山里は 色づく秋に 長ぐつはく
 昔はね 人の世の中 別れ道
 悲しみは 空のかなたへ 飛んでいく

・I→K→S 作

タイムマシン 行き先知らず 帰れない

・I→S→K 作

音楽隊 プラスバンドが 踊り出す
 寂しいな 友達いなくて 歩く朝
 夜の空 山白くして 眠る月
 はちみつを 熊はなめるよ 飽きるまで

・S→I→K 作

夜深し 山桜見る おぼろ月

・K→S→I 作

この世には いろんな時代が あり続ける
 別れても 出会いがあるよ どこまでも
 日が暮れて 朝日がのぼる ねむりたいな

『高校英語』（2～3年） 『英語文法』 『中学英語』（1～2年）

『中学英語』（3年） 『英語講読（カズオ・イシグロ）』

『ことば』（3～4年） 山の学校ゼミ 『倫理』、『調査研究』 担当 浅野 直樹

テストのためだけの学習ではなく、リアルな素材で真の学びができることを追求しています。

中学英語のクラスでは NHK ラジオの基礎英語を活用しています。ネイティブ講師による発音がリアルなのはもちろん、学習指導要領にとられない文法や単語が登場し、教養があればニヤリとさせられる場面さえあります（Shakespeare や Charles Dickens といった人物が登場しましたが、それぞれ Shakespeare や Charles Dickens を想起させます）。また、英語で書かれた小話を読むという活動を取り入れたクラスもあり、解説なしで笑ってもらえることを目標にしています。

高校英語のクラスでは数行程度の英文を和訳してもらおうという構文練習を続けています。文法説明のために作られた英文とは異なり、数行とはいえ内容があるので、文脈から理解できたり、逆に文脈がわからないせいで余計に困るということもあります。

英語文法クラスでは文法を一通り学習し終えてからは、Winnie the Pooh（『クマのプーさん』）を読んでいます。そこにはプーさんたちのおバカさを示すエピソードがたくさんあり、こちらが英語を読み間違えているのかと思わされることもしばしばです。

英語講読（カズオ・イシグロ）のクラスはその名の通りカズオ・イシグロの The Remains of the Day を読んでいます。意外なことに、こうした作品を読むためにこそ日本の英語教育で習う文法が役立ちます。倒置形による仮定法、no+比較級のいわゆるクジラ構文、not so much A as B（A というよりむしろ B）といった硬い表現が多いからです。

リアルな素材で真の学びを目指すというのは何も英語クラスに限ったことではありません。倫理のクラスではギリシャ神話、聖書、クアーン、仏教関係の書物からけっこうな分量を抜粋してきてそれらを味わっています。そうすることで各宗教の特徴が自然とつかめてきます。調査研究クラスでは現実社会での疑問を粘り強く考えています。ことば3～4年クラスでは推理小説を読んだり書いたりするという活動をしています。生徒たちが書く原稿を見ると、どこでそうした表現を覚えたのかと驚かされることがあります。学校で学んだことだけでなく、生活全体で学んだことが表現されているのだと思います。

『かず』（1～2年 A・B） 『かず』（5～6年）

担当 福西 亮馬

1～2年生のクラスでは、「足し算やかけ算を使ったパズル」、「ブロック分け」、「間違いさがし」、「迷路」をよくしました。数字を使った取り組みは、今は学校でしている勉強の確認程度にとどめています。山の学校では、ドリルは先取りではなくて復習のためにしています。それなので、1～2年生にとっては、もう少し復習する内容が増えてきたら、ドリルを始めようと考えています。先取りのドリルは、下手をすると×をつけて委縮させる機会が増えてしまいます。一方、復習であれば、○をつける機会が多く、ひいては「ほめる」ことが増えます。ほめるチャンスが多ければ、算数は好きになっていきます。

これまでの授業では、もっぱら集中力と粘り強さを課す取り組みをしてきました。そして何より、「頭をひねる」ということが「面白い」という経験を積んで、考えることが苦にならないことを応援しています。それは、特にグループでルールのあるゲームやパズルをする時ですが、私なりの目で、「この生徒は、このルールにしたならば、どういう点に着目して、どういうことを考えるのか」という、「生の思考回路」を見ています。そして光る部分があれば、それを称揚しています。そのために、ルールの違うものを持って来たり、切り口を変えたりして取り組んでいます。

生徒は複数ですが、生徒と私との関係は一对一です。その一对一の思い出が、その生徒の「算数といえば…」というイメージとなって浮かんでくれることを願っています。それを元手に、今後の算数に取り組んでほしいと考えています。

5～6年生のクラスでは、低学年のドリルから積み上げの復習をしてきました。前号の山びこ通信にも書

きましたが、その取り組みを「マイル通帳」というもので応援しています。この通帳は工夫の一例であって、本当は何であっても構いません。自分で「やろう」という気持ちを起こさせるものであればいいわけです。「上手に自分を追い込む」ことに慣れてほしいと思います。

ドリル以外の時間では、たとえば、「自分で法則を見つける」ということを考えました。「Aちゃんは、6人の男の子に6種類のチョコレートを配りたい。どのような配り方があるか？」という問題です。こういう時は、いきなり腕組みをし始めるのではなく、まず鉛筆を持って手を動かすことです。そして問題を単純にすることが大事です。まずは4人ぐらいでやってみます。そしてそれでもピンと来なければ、「1人に1種類のチョコレートの配り方は？」としてやってみます。その答は1通りです。授業では、これをヒントとしました。

さて、6人のうち、チョコレートを配る1人目の選び方は、6通りあります。「6人いるから6通り」というのが、生徒たちの挙げてくれた理由です。その通りです。これが先のヒントの「応用」です。では、その1人目を固定して、2人目の選び方は、何通りあるでしょうか？分かった人から順に、「5通り！」と返ってきました。「なぜ？」と聞くと、「さっき1人減ったから」と。すなわちここまでで、 6×5 通りです。このようにして考えれば、おのずと法則は見つけれられます。中には「飛び上がる」ように喜ぶ生徒も見られました。

その次には、「7つの目(1~7)をふさぐ、ふさぎ方は何通りあるか？(ただしふさぐ手は違いがないものとする)」という問題を考えました。この場合は、1,2とふさいでも、2,1とふさいでも同じことになるので、先の問題をもとにしながら、さらにその中の重複を省かなければなりません。こうした問題は、実際には高校で「順列」や「組合わせ」という名前で習います。しかし理屈は「かけ算」と「割り算」を駆使するものであり、小学生でも大いに分かる場合があります。彼らが「飛び上がる」ように喜ぶ時期に、それをしてみました。

このような「論理的思考」ができるようになるまでの間、1~2年生たちには、感覚から徐々に論理の世界へと移ってくるための下ごしらえをしてもらっているとも言えます。

『かず』(3~4年) 『中学数学』B 『高校数学』 担当 浅野直樹

目的意識をはっきり持って取り組むということを重視してきました。

かず3~4年クラスでは、前半の『ウォーリーをさがせ』と迷路には集中して取り組んでなるべく早くクリアし、後半にいろいろなボードゲームやパズルをするというスタイルが確立されています。『ウォーリーをさがせ』では漠然と眺めているだけでは見つからないものが、目的意識を強く持って探すと見つかることが多いです。迷路もゴールという目的をはっきり意識すれば自ずと解法が見えてきます。ボードゲームでも目的と現状を考慮すれば有効な戦略は限られてきます。やみくもにプレイするのではなく、こうした合理的な戦略同士がぶつかるときに最高の面白さを味わうことができます。モノポリーでは、どの物件で勝負するかということに加えて、物件を抵当に入れて利息を払ってでも勝負に出るかどうかという大きな戦略や、制限時間を見越して最後の資産評価で得をするように人気のない物件を定価より安く買うといった細かい戦略を駆使した見応えのある勝負が展開されましたし、カルカソヌでは1ターンで人形を回収して少しの得点がある「ショボかせ」(このクラスで自然発生的に使われるようになった「ショボイ稼ぎ」の略語)を行うか、ベタに大きな街を取りに行くか、それともこっそり草原で最後の逆転に賭けるかが見どころになりました。

中学数学Bクラスは事実上中3生のクラスなので、高校入試に当面の目標を合わせることになりました。そうすると最高の資料は過去問や模試ということになります。そして漠然と過去問や模試を解くのではなく、はっきりと戦略を立てて取り組んできました。何度でも繰り返し申しますが、京都府立高校の数学では大問1の計算問題が最重要なので、その中であまりできない分野があるとしたらできるようになるまで練習することです。大問1がおおよそできるようになれば、あとは関数、図形、確率、規則性の問題で好きなもの(解けそうなもの)から一つずつやるのみです。

高校数学では2次関数を学校で習ったときにはできなかったのが、冬期講習、何でも勉強相談会、そして通常の高校数学クラスで一步ずつ進んで、それなりに理解したということころまで到達しました。そもそも2次関数があまりできないという自覚があったということが立派ですし、その2次関数のうちでもグラフはかけるが平行移動がよくわからないからわかるようになりたいというように目的意識をはっきりさせて取り組めたのがよかったと思います。

中学生のクラスでは、最近では、主に学校で習った直近の単元の復習をしています。今は一年生、二年生とも幾何の内容です。問題を易し目に設定し、「できる」という自信を持つことから始めています。その自信によって、学校の授業での吸収力が上がることを、また家でも自主勉強の励みにしてくれることを望んでいます。

そして、余力がある時には、整数論や教え上げと呼ばれる分野から一題出し、「予備知識なしで（いわゆる素手で）帰納的に考えて法則を見つける」ということもしています。それを「面白い」と言ってくれたり、解けた時に「にっこり」としてくれる手ごたえがあると、私もつい嬉しくなってきます。

数学では、よく前提を疑うことがなされますが、そのことは、授業で私が生徒と向き合う時にも考えなければならない問題だと思います。前提とは色眼鏡のことです。私はクラスでは、生徒を数学（小学生なら算数）という一面でしかお手伝いすることができません。けれども、「数学をしている A さん」というのは、もちろん A さんが私にその時間見せている一面にすぎません。家に帰れば「別のことをしている A さん」が、その A さんであり、A さん自体は、もっと「複雑多様」な何かであるわけです。それがむしろ当たり前のことだと思います。けれども、授業という「特殊環境」の下では、しばしばその当たり前を忘れてしまいがちです。よって私は、「様々な一面を持っている A さんが、この時間においては、数学という面を選択して取り組んでいるのだ」という目線に立つ必要があります。その上で、数学という一面を通して、「A さん」なる全体をできるだけ応援したいと思っています。

『中学英語』（1年）『高校英語』（1年）



中学 1 年英語の授業は、生徒さんのご要望に合わせて秋学期から授業方法を変更いたしました。春学期以前は学校の教科書の予習・復習に力を入れていたのですが、秋学期からは、まとまった量の文章を読んでいくという講読の形態になりました。

方法としては、あらかじめ講師が授業で進める分のページをコピーして渡し、生徒さんは次回の授業までに分からない単語を調べてきてもらって授業に望みます。教室では、講師が 1 段落ずつ文章を音読して、生徒さんがそれを繰り返し、さらに英文を日本語に直します。その上で、講師が単語や文法的な説明を加えていきます。

私がこの授業の中で重視しているのは、音読です。前者については、特に英語を学び始めた中学生にとって特に力を入れなければならない部分だと思います。というのも、英語は他の言語に比べて、綴りと発音に関する規則のパターンが多く、それらを日常的な運用で反映させるためには、正しい方法で一定量の単語に触れねばなりません。毎週、分からない単語を自分で調べ、教室で改めて正しい発音と共に理解するという経験は、生徒さんにとっては大変だと思いますが、その分の配当は少しずつ支払われていくことでしょう。

教材としては、最初はイソップ寓話集から 1 日 1 つずつ選んでいました。1 つの話につき 2、3 ページしかないもので、細かい文法や単語の説明をしながらでも 80 分の授業の中で、読了できました。冬学期からは、「アーサー王伝説」について書かれた子供向けの本を読んでいます。イギリスの歴史的背景にも触れながら、日本の公教育では軽視されがちな神話や伝説を学ぶことの意義を、講師と生徒が共に考えることもこの授業の目的です。

高校 1 年英語の授業の方は、今まで通りの授業方法を続けております。高校で用いる教科書の文章を生徒さんにノートに写してきてもらい、教室で講師・生徒共に音読、その上で生徒さんが文章を日本語に訳していく、という中学クラスと同じ講読のスタイルです。

ただし、高校クラスの方では音読は言わずもがな、精読に特に力を入れております。巷での多読・速読の流行のせい、単語ごとの正確な意味や文章同士の関係を考えながら、時間をかけて英語を日本語に直すという方法が軽視されているように見えるからです。IT 社会で、情報の波に溺れないよう、多く速く読める力は不可欠なのは確かですが、だからこそ、大人になる前に正しく読むことを身につけるべきだと思います。本当の意味で文章を「読む」ことがいかに難しく、骨が折れるかを日々、痛感しているのは、他ならぬ講師自身ですが…。

『ロボット工作』

担当 福西 亮馬



このクラスでは、一年間、1年生にはミュウロボを使い、3年生には Arduino というマイコン基盤と Twe-Lite DIP という無線モジュールをベースにして、それぞれロボット・カーを作ってきました。1年生はライントレース、ピンポン玉拾いときて、今は迷路脱出の課題に取り組んでいます。また、有線でも動かせるように、コントローラーを自作しました。3年生は、「小型カメラの取り付けて遠隔操作したい」という仕様を考え、それを実現させようと頑張っています。無線モジュールの実験と、モータードライバーの自作まではうまくいったのですが、それらの

実装が山あり谷ありで、残念ながらまだ念願のカメラの実装までは行っていません。何とかしたいと考えています。

さて、これは来年から中学生に上がる新1年生向けの告知です。最初のうちは、小学生の頃にしたイベントの延長で、「電子工作」が中心になります。LED や抵抗、コンデンサ、トランジスタといった部品を使います。そして部品の取り扱いに慣れてもらった後に、有線のロボット・カー作り、はんだ付けが中心になります。そのあとの展開として、プログラミングで動かすミュウロボを使おうと考えています。プログラミングは、パソコン環境がないとなかなか先へ進めませんが、他の部分については家に持って帰ってできるので、どんどん「作って」「実験」してみてください。

山の学校ゼミ 『数学』

担当 福西 亮馬

このクラスでは、昨年度の春学期から『虚数の情緒』（吉田武著、東海大学出版会）を読んでいます。この原稿を書いている頃には、1,000 ページ中の 600 ページを超え、第二部の最後まで読み終えました。これで見方的には三分の二にたどり着いたことになります。

冬学期の内容は、虚数 i を e^i (e はネイピア数) へと、また x から e^x から e^{ix} へと順次パワーアップさせ、ついにオイラーの公式 $e^{ix} = \cos(x) + i \sin(x)$ へと進化させる、というのがあらすじでした。虚数 i は、前学期から引き続き主役です。今学期は、重要な脇役としてネイピア数 e が登場しました。 i を「肩に乗せている」土台です。そのネイピア数を、テキストの方法（電卓計算）に沿って、指数関数 $y=10^x$ や $y=2^x$ の中から発見しました。そこで使った強力な概念ツールが、「線形近似」でした。線形近似とは、幾何学的には、曲がったものをまっすぐなもので、数式で言うと、一次関数で表すことです。たとえば、 $e^x \approx 1+x$ です。この一見無理矢理な話は、あとで「微分」という概念につながります。

また、 e^{ix} は、ただの複素数になります。つまり複素平面（2次元平面）上の「点」に当たります。そしてこの「点」が持つ幾何学と三角関数との対応関係、また三角関数の周期性と虚数倍（ $\times i$ ）の周期性とを見比べることにより、念願のオイラーの公式へとたどり着きました。テキストの最終章は、ここで得たオイラーの公式が、物理的な世界（力学）でどのように活躍しているのか、その檜舞台を鑑賞する内容となっています。その時に e^{ix} は $e^{i\omega t}$ と少し改名し、 ω は周波数、 t は時間という具体的な意味合いを持つようになります。「振動あるところに $e^{i\omega t}$ あり」というのが、第三部の予告です。

ところで、指数や三角関数は、高校数学のおさらいになりますが、テキストでは電卓計算という異なるアプローチで見えてきました。そこで素に戻って、受講生の M さんの提案で、高校の教科書を当時の懐かしさとともに開いてみました。すると、加法定理にしても、「こんなことが書いてあったのか」と、かえって腑に落ちるところがありました。（当時は私も無味乾燥にしか思えずに、読み飛ばしていました）。こういう「時間差」の理解というものも、大人になった今だから味わえる、妙味の一つなのかもしれません。

山の学校ゼミ 『社会』

担当 中島 啓勝

時事ニュースの解説と課題図書の話の二つを軸に進めているこの授業では、ここ数期にわたりイスラム世界についての話題を取り上げる機会がますます多くなっています。自分で授業を展開しておいてこんなことを言うのもおかしいかもしれませんが、必ずしも日常的にイスラム教について強い関心を持っていたとは言えない受講者の皆さんに、ほぼ毎週のように中東や北アフリカ、または東南アジアで起こっているイスラム関連の

ニュースを解説するのはやり過ぎかも、と感じるほどでした。しかし、皆さんもニュースなどでご存じの通り、私たちの住むこの日本の政治状況から見てイスラム世界で起こる諸問題はもはや無関心を決め込むことが許されない、無理解や無知が事態を悪化させかねない、そんな喫緊の課題となりつつあります。この授業では多様な意見のバランスを欠くことなく、宗教や文化的な価値についても解説を重ねながら、比較の視点をもって多面的かつ複合的にニュースを分析し、ディスカッションをしていくように心がけています。また、これまで通り、グローバル政治経済に関する大きなニュースについてはテレビや新聞ではあまり詳しく取り上げられない背景にも深く触れながら紹介していこうと思っています。

ニュース解説と並ぶもう一つの柱である課題図書の講読についてですが、これまでは歴史関連の書籍を取り上げることが多かったので今学期は少し趣向を変え、現代の日本をテーマにした本を選んでみました。昨年中頃に発表され今なお大きな反響を呼んでいる、増田寛也編著『地方消滅』（中公新書）です。岩手県知事や総務大臣を務めてきた編著者が中心となって行われた調査「増田レポート」をもとに、日本が非常に厳しい人口減少社会の時代に突入する、いや、既に突入しているというデータを紹介しています。少子高齢化という現象については皆さんも身近な問題として感じる人が多いと思われそうですが、実は全国で若者どころか高齢者すらも急減していく市町村、「消滅可能都市」が大量に発生しつつあるというのです。今まで「限界集落」と言えば、山奥や離島などのかなりひなびた一部の地域の話だと感じていた人も多いかと思います。しかしここで提唱されている「消滅可能都市」とは、そうした予想をはるかに越える規模と数、そして分布を示しています。その数、何と 896。この急激な人口減少社会への転落がどのような帰結をもたらすのかを予測し、政策提言に繋げようというのが、本書の目的です。

山の学校ゼミ（社会）では、この本の講読を通じて社会問題としての人口減少についても学びながら、「子育て支援」「介護問題」「移民受け入れ」などのキーワードを織り交ぜながら受講者の皆さんと議論を進めていく予定です。特に、京都という地域の強みや特色、しかしその裏にある隠れたリスクなどについても考えていきたいと思えます。興味のある方の参加をお待ちしております。



▲ 山の学校ゼミ『社会』『経済』の合同授業（2014年8月）

山の学校ゼミ『経済』

担当 百木 漠

このクラスは、主に経済ニュースの解説と経済書の輪読の二本柱でやっています。

経済ニュースでは、以前はよくアベノミクスについての解説をやっていたのですが、最近はおっぱらトマ・ピケティの『21世紀の資本』を話題に取り上げています。この本は600ページ超の経済専門書にもかかわらず、昨年12月の発売からすでに13万部を売り上げ、社会的に大きな話題になっています。本の内容を一言でいうと「近年、富の格差が20世紀前半レベルにまで拡大している」ということなのですが、世界各国の富・所得の格差データを100年～200年のスパンで収集し、長期的な格差の変動を実証して明らかにしてみせた点に高い評価が集まっています。そのうえで r （資本収益率） $>$ g （経済成長率）という非常にシンプルな公式によって、その長期的傾向を示してみせたことにピケティの功績があるのだらうと思えます。

1月にピケティが来日していたこともあって、テレビや新聞などで取り上げられる機会も多かったようです。受講者のおふたりもこのピケティブームには関心を持たれていたようだったので、ピケティの主張について三人であれこれと色々な議論をしました。ピケティの功績を認めつつ、しかし彼が提案しているグローバル資産課税というアイデアは本当に実現可能なのか、それ以外に格差を是正する良いアイデアはないのか、そもそもこの富の格差を本当に是正する必要があるのか、など幅広い観点から議論をすることによって、現在の世界経済のあり方についての理解を深めてもらえたかと思っています。

輪読本としては、堂目卓生さんの『アダム・スミス『道徳感情論』と『国富論』の世界』（中公新書）を読みました。春学期にアダム・スミス『国富論』を読んでいたのですが、途中からだんだん話が難しくなってきたという声が出たので、それではいちどスミスの解説書を読んでみましょうということになり、バランスの取れたこの本を選びました。優れた古典というものは常にそうですが、『国富論』や『道徳感情論』におけるスミスの洞察も、現在の社会にそのまま当てはまるような鋭い指摘が多く、いつも読んでいて感心させられます。輪読の際も毎回、現在の経済ニュースに引きつけながら、受講者の方と一緒に議論をすることで理解を深めていただくようにしています。

次からは水野和夫さんの『資本主義の終焉と歴史の危機』（集英社新書）を読もうかという話になっています。この本も昨年20万部を売り上げて話題になりましたが、文明史的な観点から資本主義の行く末について考えよう（資本主義の終焉か？新しい資本主義なのか？）という趣旨です。講師の私自身も毎回学ばせていただきながら、授業を進めています。

相変わらず三名で講読しているダンテの『新生』、一年がかりでようやくですが、そろそろ終わりが見えてきました。前回三分の二まで進んだと書きましたが、もう五分の一も残っていません。一昨日（1月26日）ちょうど読んだところですが、ベアトリーチェが夭逝して一年後のある日、ダンテは、「彼女を思い浮かべながら板の上に天使を描いて」いました。つまりベアトリーチェの絵を描いています。知り合いが傍で見ているのにも気づかないほど夢中になって、何枚もの板に（天使は単数ですが板は複数です）。天使の絵を「描いて」いたには色を塗るという意味はありませんが、板絵なのですから、彩色された可能性もあります。なかなか心を打つ情景だと思っていたら、「そういえばダンテには画才があったようですね」と広川先生。なるほど、言われてみれば、『神曲』には、チマブーエやジョットに触れた有名な一節もありますが、なによりも神曲の絢爛豪華な視覚的イメージが雄弁に語っています。ところで、ダンテの用いる語彙は、洗練された言葉のみのペトルルカとは対照的に、実に幅の広いもので、『神曲』はバロック的な豊かさに沸き立っています。ならばダンテが絵を描いていたら、同時代のジョットとはまったく違うスタイルの絵になったでしょう。もしダンテが描いたベアトリーチェの絵が発見されたら！などと空想してわくわくするのは、とてもマニアックなことではありますが、しばらく前までナポリには、パルテノペの遺骸発掘を目的として設立された協会がありました。パルテノペはナポリの古名ですが、伝説にしたがえば、パルテノペは、オデュッセウスをみすみす逃してしまったセイレーンたちの一人です。彼女は悔しさあまって海に身を投げました。その死体が打ち上げられた浜辺に、都市が建設され、パルテノペの名が付けられたのだといひます。少なくとも、パルテノペの遺骸（キリスト教の聖遺物と同じノリです）よりは、ダンテの絵を発見の方が可能性ありそうですね。

会員の声 ● ● ●

イタリア語講読クラスで 学ぶもの F.N.さん

イタリア語講読クラスで、ダンテの「新生」を読んでいます。「新生」は13世紀末の作品で私にとっては初めての古典なのですが、イタリア語の柱本先生、ラテン語・ギリシャ語の広川先生とご一緒させていただくという幸運のお蔭で、なんとか楽しく読み進めています。

それでも、日曜日の夜中から月曜日の早朝、その先の一週間の仕事なども気になりつつ予習をしていると、このような古典作品を読むことが一体何の役に立つだろうと思うこともあります。確かに、ne の使い方は前よりわかってきたような気がする。ire は andare の古語だと覚えた。labbra は「唇」だけ顔そのものを表すこともある（興味深い）。…でもそれが何か？

教養のため？そもそも教養って何？

イタリアの高校生を疑似体験？（高等学校では「新生」ではなく「神曲」を読むそうですが）仕事の役には…立たないでしょう。仕事で古語は使わないし（現代イタリア語も滅多に使いません）、仕事相手とベアトリーチェについて話し合うことになる可能性もきわめて低いし…

そんなある日のクラスで、ふと、詩のことからレトリック論に話が及びました。最初は「詩学？サトウノブオ？これはまたきつとついていけない話し」と片耳で聞いていたのですが、途中で、あっ、佐藤信夫のレトリック論は私の本棚にあったはずと気が付いて、約20年ぶりに本を手取ることとなりました。

読み返してみたその本（「レトリックの記号論」講談社学術文庫）は、初読時の記憶以上に面白かったうえに平易にレトリックの基礎が説明された章もあり、「新生」の理解にも役立つのですが、それ以上に示唆的な一文がありました。

「昔からの修辞技法のひとつとして類義累積あるいはシノニミーと呼ばれている表現形式は、いわば、既成の言葉でとめどなく周辺部から塗ってゆき、やがてその中心部に、色とりどりの透明えのぐの重量によって、おぼろげに濃く暗い形態が現れ出ることを期待する手だてであった。」（前掲書中「読む楽しみ（の記号論）」より）

イタリア語講読クラスで学ぶものはまさにこういうものではと感じます。代名詞の使い方や、古語の単語や、恋慕の表現のひとつひとつは、中心にあるものを現出させるために周りに塗り重ねる薄片であって、本当に学んでいるものは、その中心なのでは。

ただその「中心」が何なのかは、わかりません。イタリアの人びとの特質、主に情熱であるような気もしますし、空間的、時間的な世界の深さを学ぶことであるような気もします。あるいは、学ぶことで現れるものは結局のところ自分自身であるような気もします。いや、そんなにおおげさなものではなくて、単にイタリア語力、かも…

いずれにしてもイタリア語を習いに行つて佐藤信夫を再読することになるとは全くの予想外（でもこのようなできごととは一度ではありません）、多くの刺激を頂けるありがたいクラスです。山の学校を運営してくださる皆様に心から尊敬と感謝を申し上げます。12周年おめでとうございます。





フランス語講読の授業は昨年から引き続き、17世紀フランスの哲学者ルネ・デカルトの『方法序説』をA、Bふたつのクラスで読み進めています。

Aのクラスは現在第5部の後半まで来ています。『方法序説』の山場ともいえるべき第4部を終え、ここから話はデカルト流の自然学に移っていきます。自然学といっても、ここで述べられているのは、人間の身体、それもとりわけ心臓がどのようなつくりになっているか、またどのような働きをしているのか。そして人間と他の動物はどこが違うのか、といった話です。デカルトは心臓を「光なき火」を持った器官と考えており、この仮説から血液

の循環や体液の生成を説明しようとしています。こうした考えは、現代の知識に照らせば誤っているとも言えるのですが、デカルトが当時知っていた知識と、知らなかった、あるいは知りえなかった知識を分けて考えることにより、デカルトがどのような知識をもとに、なにを考えたか、それを考えながら読み進めています。現代の知識を元にして、過去の人々をあたかも無知な人間のようにみなすのは、やはり現代人の思い上がりだと言わざるをえないでしょう。これは他国や他文化の人々に対する態度にも言えることではないでしょうか。

Bのクラスは第3部の終盤を読み進めています。デカルトは絶対で確実な真理の探究を目標に掲げるのですが、それではこの真理を探しているあいだはどうしたらよいのでしょうか。それがこの部の主題であり、そのための当座の規則が、ここで語られる「暫定的道徳」と呼ばれるものです。自国の慣習や風習、宗教に従うこと、一度決めたことはよほどのことがない限り守り続けること、運命よりも己に打ち克つよう努めること、などが語られていきます。とはいえこの規則はあくまでも「暫定的」なものにすぎません。次の第4部に入ると、「我思う、故に我あり」という命題が絶対に確実な真理として見出されることになるのです。Bのクラスも、もう少しでこの真理に到達できそうです。

どちらのクラスも、分かりにくい箇所に関してはなるべく文法的な説明も加えるようにしています。デカルトの文章は一文が長く、決して簡単ではありませんが、非常に明晰な文体で書かれており、文法的に破格な箇所というのはほとんどありません。『方法序説』を原文で読みこなすことができるようになれば、現代の大抵の文章は読めるようになるのではないのでしょうか。フランス語の学習という点においても、非常によいテキストだと日々感じています。



『ロシア語講読』

担当 山下 大吾

今学期読み進めてきた『ジプシー』は、プーシキン南部流刑時代に記された物語詩の一つで、その中では、同時代に記された『カフカースの虜』やその後の『エヴゲーニイ・オネーギン』などプーシキン自身の作品のみならず、トゥルゲーネフの『ルージュン』など19世紀ロシア文学で幾度も繰り返される典型的な人間像となった「余計者」が主人公アレコの様子をとって毒々しいまでに具象化されています。

上辺だけの豊かさや無用な掟に縛られ、人間の本来有する大らかさや純真な愛情を押しつぶしてしまう上流社会の環境を忌み嫌うあまり、その様なしがらみとは無縁の、未開の営みに対して救済の望みを抱きつつ、自ら漂泊の民ジプシーの世界へと足を踏み込んでいくアレコ。美しいジプシー娘やその老父と生活を共にすることで、文化的な澱を完全に払落し、純粋な人間に回帰したと思ひ始めたその矢先、ふと沸き起こった恋愛沙汰が契機となって、結局何より彼自身がその文化的害毒に侵されきってしまった人物であることが暴露されます。その様な主旋律の傍らでは、当地に流されてきた老オウィディウスにまつわる伝説や、「神の小鳥は苦勞も心配も何一つ知りはしない」で始まる歌の調べが色を添え、またそのロシア語も、「未開」や「掟」といったキーワードが効果的かつ印象的に繰り返され、さらに劇仕立てと言えほどの硬く重々しい響きの台詞で、例えばアレコの陰湿この上ない怒りを浮かび上がらせるなど、文体や表現の妙は他のプーシキンの作品同様微塵の隙も見せません。

前回の「山びこ通信」で『モーツァルトとサリエーリ』を間もなく読み終え、引き続き『ジプシー』に進む予定ですとお伝えしましたが、今回も丁度同じような巡り合わせで、二月二週目の授業でフィナーレとなりました。内容や文章の難易度など様々な理由が重なり単純な比較は勿論できませんが、後者は前者のほぼ倍の分量に相当するため、講読のスピードは格段に上がっていることとなります。これもTさん、Nさんお

二方の不断のご努力の何よりの証、自信も深められているように察せられ、指南役としては嬉しい限りです。この勢いを大切に保ちながら、今回はこのクラス初の本格的な散文作品となる、後期チューホフの代表的短編の一つ『殻に入った男』に取り組む予定です。

『ラテン語初級文法』『ラテン語初級講読』(A・B・C) 担当 山下大吾

今学期の文法クラスは、受講生 Y さんを迎えて三箇月で終える速習コースで開講されました。教科書は岩波書店刊田中利光著『ラテン語初歩 改訂版』を用いています。Y さんは大学でフランス文学並びに哲学の研究に取り組まれ、この先研究を進めていくに当たり、単に語学的側面に留まらないラテン語の文化史的意義や必要性を痛切に感じられたとの由。ラテン語の文法変化やそれに伴う用法の多用さに少しく驚かれつつも、スピノザやデカルトを原典で読むという明確な目的意識と共に勉学に励まれております。

講読クラスでは引き続き A クラス並びに C クラスではキケロー、B クラスではホラーティウスに取り組んでおります。いずれのクラスも文法を一通り終えられた方でしたら参加可能です。

A クラスは開講以来継続受講されている H さん、Ara さんに加え、今学期から新たに T さんと、前学期まで文法クラスを受講されていた Asa さんが参加され、俄かに賑やかなクラスとなりました。テキストも装いも新たに『アルキアース弁護』となっております。このクラスでは『カティリーナ弾劾』以来の弁論となりましたが、前学期まで取り組んでいた『老年について』などの哲学的対話篇とは一味異なる文体や修辞技法の冴えに留意し、冒頭部で頻出する *humanitas* 「人間の教養」の意味を噛みしめながら、一語一語読み進めております。

C クラスでは引き続き『友情について』に取り組んでおります。受講生は Ci さんお一方で、全体のおよそ半分当たる 47 節まで進みました。その 47 節には「心労から逃げようとすれば、徳からも逃げなければならない」という至言が収められています。

B クラスでは『書簡詩』の 1 巻の各歌を順に読み進め、現在第 7 書簡を講読中です。受講生は引き続き Ca さん、M さんのお方で、ホラーティウスならではのユーモア、ウィットにも大分親しまれてきたように見受けられます。

註釈書を参照すると、ホラーティウスの作品には、膨大な量に及ぶ全ラテン文学中でただ一度しか用いられていない例、いわゆる *ἄπαξ λεγόμενον* (ハパックス・レゴメノン) がかなり多く含まれており、しかもそれらが一見するとどこでも見られるような、比較的容易に読み解ける表現や語句であることに気付かされます。『詩論』の 242-243 行で述べられる「語の一続きとつながりにはとても力があり、平凡なことから採られたものには多大な名誉が加わる」という彼の持論は、決してこのような例のみを対象としていないのは明らかですが、これらのハパックスは、一流の詩人としての証をさりげなく示している有言実行の好例と言えるのかも知れません。

『ラテン語初級』『ラテン語初中級』『ラテン語中級』

『ラテン語上級』

担当 広川直幸

ラテン語初級では Hans H. Ørberg, *Lingua Latina I: Familia Romana* を用いて古典ラテン語の初歩を学んでいる。2月5日の時点で第25課に入った。文法事項の導入は相変わらずゆっくりとしたペースで、第24課でようやく過去完了が導入された。これはこの教科書の良い点で、要するに、少しの文法で多くの語彙を学ばせているのである。Ørberg の教科書の一卷目を念入りに仕上げれば、語彙不足に悩まされることなく原典講読に進むことができる。とはいえ、文法の全体像を把握しておくことも大切なので、近々この授業を補うための文法の講習会を開講するつもりである。

今学期から開講したラテン語初中級では受講生一名と本格的な原典講読の前段階としてやさしいラテン語を読んでいる。手始めに Brian Beyer, *War with Hannibal: Authentic Latin Prose for the Beginning Student* を用いて、Eutropius の第3巻を読んだ。この本の註釈はくどすぎるが、エウトロピウス自体は文法を学んだだけの人が読むのに適していると思う。現在は、カエサル『ガリア戦記』を初めから読んでいる。

ラテン語中級では受講生二名と Hans H. Ørberg, *Lingua Latina II: Roma aeterna* を粘り強く読み進めている。2月2日の時点で第54課の402行まで進んだ。この課の大部分はキケローの演説 (*De imperio Cn. Pompeii*) なので、演説特有の凝った言い回しに受講生は四苦八苦しているが、その辺は慣れの問題であるし、この課が終われば残すところあと2課。ゴールは目前である。

ラテン語上級では Peter Dronke, *Nine Medieval Latin Plays* をテキストに受講生一名と中世ラテン語劇を読んできた。昨年末にヒルデガルトの *Ordo Virtutum* を読み終えて、現在は古典期に戻って Catullus を読んでいる。軽快な hendecasyllabus が心地よい。授業用のテキストとしては一応 D. H. Garrison, *Student's Catullus* を指定した。適度な註釈と地図や図表、用語集と語彙集がついた親切な本であるが、本文批判について全く言及がない。Catullus のように写本伝承の悪い作家を読む場合、その点を無視することはできないので、プリントなどで適度に補うようにしている。

『ギリシャ語初級』 『ギリシャ語中級』(A・B)

『ギリシャ語上級』

担当 広川直幸

今学期から新規開講したギリシャ語初級では Peckett & Munday, *Thrasymachus* を教科書に受講生三名と古典ギリシャ語の初歩を学んでいる。長らく *Thrasymachus* のリプリントを出版していた Bristol Classical Press がハリー・ポッターで有名な Bloomsbury に吸収合併された関係で教科書が入手しづらいという予期せぬ問題が起きたが、それも何とか解決し、ようやく授業が軌道に乗ってきたところである。以前 *Thrasymachus* を用いて教えた時は中学生が受講生だったので、文法の説明をしてから本文読解に進むという形式を取った。*Thrasymachus* はラテン語既習者を対象としているため、ラテン語の学習あるいは英語以外のヨーロッパの言語の学習を通じて屈折という現象に親しんでいることが前提となっているからである。今回は語彙集のみを頼りに本文読解をした後で文法解説をして練習問題に進むという *Thrasymachus* 本来の順序に従って進めている。簡単に言えば「発見的学習法」である。天下り式に与えられた文法規則にがんじがらめにされるよりも、自分で法則を発見しながら学ぶほうが面白く効果的であると思う。このやり方だと疑問点や不確かな点が山のように現れることは承知の上で行っているので、どしどし質問してもらいたい。

ギリシャ語中級 A では受講生一名と『イーリアス』を一回に 30 行程度読んでいる。先学期終盤に第 22 歌を読了し、現在は第 24 歌を読んでいる。2 月 6 日の時点で 222 行まで進んだ。テキストには引き続き M. L. West 校訂のトイプナー版を用い、註釈には C. W. Macleod, *Homer: Iliad Book XXIV* (ケンブリッジの黄色と緑のシリーズ) を用いている。

ギリシャ語中級 B では受講生二名とプラトーンの『パイドーン』を読んでいる。テキストと註釈は Burnet と Rowe を併用して、一回の授業(2 コマ分)で 2~3 ページ程度読み進めている。1 月 24 日の時点で 99d まで進んだ。ちょうど「第二の航海」についてソークラテースが語り始めるところである。この調子で行けば、春学期で読み終えることができるかもしれない。また、North & Hillard, *Greek Prose Composition* を用いた作文の練習は Exercise 104 まで進んだ。

ギリシャ語上級は昨年末についてソポクレースの『オイディプース王』を読み終え、新年初回からアイスキュロスの『テーバイ攻めの七将』を読み始めた。受講生は一名。非常に難解なので一度に進む量はそれほど多くない。1 月 27 日の時点で 107 行まで進んだので、平均すると一回に 26、7 行である。テキストは M. L. West 校訂のトイプナー版を用いている。註釈にはソポクレースにおける Jebb のようにまずはこれをというものが無いのが悩ましい。ひょっとすると Collard の英訳が一番役に立つかもしれない。

『新約ギリシャ語初級』

担当 堀川宏

昨年 12 月から、新たに新約聖書のギリシャ語を学ぶ授業がスタートしました。土岐建治『新約聖書ギリシア語初歩』(教文館)を教科書に、いずれも熱心な 2 名の受講生とともに学んでいます。2 月 5 日現在、第 9 章まで進んでいます。

新約のギリシャ語は、古典ギリシャ語(紀元前 4 世紀頃までのギリシャ語)に比べて比較的学びやすいと言われます。それでも、多様な語形変化のパターンを記憶し、それに習熟してゆくためには、日々の地道な努力が不可欠です。授業ではそのことを再三確認しつつ、ギリシャ語の文例が示す文法的な特徴を手がかりに、なるべく正確に意味を立ち上げてゆく練習をしています。6 回ほどの授業を通して、ずいぶんスムーズに意味をとれるようになってきたように思います。

今後も同教科書を、無理のないペースで進めてゆく予定です。先へ進むにつれて既習の文法事項が増えてゆきます。受講生には今後も、記憶すべきことをそのつど確実に記憶するようにし、一度学んだ文例は折に触れて口ずさむなどして、既習事項への習熟に努めることを望みます。授業での解説や雑談が少しでもその役に立てばと思っています。

『自分で考えて 答えを見つける体験を！』

講師：山崎和夫 (京都大学名誉教授)



● 山崎先生の講演会に参加して 山下 太郎

先生の講演会に参加して感じたことは、このようなお話を中学か高校時代に聞いていたら、自分の人生は変わったに違いないということでした。前半は数学的思考の楽しさを味わい、後半は「魂が魂に語り掛ける」先生の気迫に満ちた言葉の魅力にふれました。ご講演後、先生が 87 歳とは思えない、ご高齢の先生がこれほど熱意をこめて語ってくださる姿勢に感銘を受けた、といったお声をあちこちからちょうだいしました。私もまったく同感でした。

先生によれば、数学の法則は千年たっても「正しいものは正しい」のに対し、物理学の法則は「永遠に正しいとは言い切れない」——数学的正しさという意味において——、だからこそ、自分にとって物理学の定説は、常に「なんでや？ なんでや？」と疑う力を強く喚起するものであり続けた。学問において一番大事なことは、この「なんでや？ なんでや？」と、絶えず根拠を疑い、問い続ける態度です、というメッセージをいただきました。

お話をうかがいながら、私は——タイミング的に今回の山びこ通信巻頭文を書いていた時期と重なったこともあり——キケローの肉声を間近で耳にしているかのような錯覚にとらわれました。そして、「議論を行うさいには、権威よりも理論の説得力こそ求められるべきである」というキケローの言葉を意識するなら、(京都弁で)「なんでや？ なんでや？ と問うことが一番大事」となるな、と一人合点しておりました。

今回はもう一つ、ご縁というべき運命の不思議を感じました。といいますのも、先生のご尊父は、京大の西洋古典学講座の初代教授、田中秀央先生にほかならず、私の祖父は生前田中先生と親しくさせていただいたのでした。父から聞いたことですが、晩年の田中先生はあるとき本園に勲章を持ってお越しになり、全園児の前でそれを披露されながら、「みなさんも、努力してこういう勲章がいただけるような立派な人になってください」とお話くださったということでした。

今回山崎先生は幼稚園の園舎にお越しになり、本園の卒園児、保護者、山の学校の会員を前に貴重なお話をしてくださいました。そのお言葉の一つ一つは、輝く勲章の煌めきのように、参加者一人一人の心を魅了し、鼓舞するものでした。この場をお借りし、先生にはあらためて感謝申し上げます。

● 『学びの夕べ』——自分で考えて見つける体験を！ 福西 亮馬

2015年1月31日(土)に行われた、『学びの夕べ』についての報告です。

講師は、京都大学名誉教授の山崎和夫先生。山崎先生は、京都大学基礎物理学研究所で湯川秀樹先生の助手を経て、ドイツのマックス・プランク物理学研究所で約十年間、ハイゼンベルク先生のもとで理論物理学を研究されました。また翻訳業においても、『部分と全体』(ハイゼンベルク著、山崎和夫訳、みすず書房)などの訳書を世に送り出されました。先生は京都の北白川(「山の学校」のご近所)にお住まいで、北白川幼稚園とのご縁も深く、この日の会が実現しました。

ここからの記録は、山崎先生のお話を聞いて、私自身が記憶している部分になります。内容の理解に間違いが含まれている恐れがあります。以下はどうかそのことをお含みおきください。

会の前半は、数学の問題を、会場のみなさんが個々にまたは一緒になって考えました。「法則を見つける」という時間でした。後半は、物理学のテーマから宇宙や素粒子のお話を伺いました。

小学生から、「前半と、後半と、どのようなつながりがあるのですか？」という質問がなされました。それに対し、山崎先生は次のような主旨で答えられました。

「前半で考えた数学の問題は、抽象的です。だからこそ、一度正しいと証明できれば、今後もずっと正しいと言える事柄です。一方、後半で話した『宇宙に果てはあるか？』という事柄は、具体的です。それは、今正しいと考えられていることが、いつかは



そうでない日が来てひっくり返るかもしれないという問題を含んでいます。どこまで行ってもそうなのです。数学で考えた点はどんなに拡大しても、点のままで大きさを持ちません。一方、身の回りにある点はどんなに小さくても、(宇宙の大きさまで) 拡大することができます。すると『一兆円を一兆分の一秒間だけ借りてきて、都合、一秒間に一円だけ借りた』という解釈も成り立ってしまいます。そこが抽象的なもの(数)とは違う、具体的なもの(物理)を考える上で難しいところです。けれどもその分からない物のことを分かりたくなり、突き詰めていこうとすると、やはり数学という考え方が、抽象的だからこそ目に見えない物事に対して有力となってくるのです」と。

たとえば、これは大人の方からの質問でしたが、「ダークマター(暗黒物質)のような、光で観測することのできないものの存在を知ろうとするには、どうしたらいいのでしょうか」という疑問に対しても、「対称性という数学の概念が(光に代わる物の候補として)考えられてきました」というお話がありました。

それから、先生は『ラプラスの悪魔』という話を引用して、因果律の話をされました。ラプラスの悪魔とは、十九世紀、微分方程式の研究が盛んに行われ始めた頃にラプラスという人が考えた、「もしすべての原因となる出来事を瞬時に理解できる全知全能の存在がいたら、その者はすべての未来(結果)を知ることができるだろう」という、その考え方自体のことです。そして科学者の中には、この原因と結果の法則を知ることの延長線上に、「今は分からないことがあっても、いつかはそのすべての分かる時がやって来る」と信じている立場があります。そこで、山崎先生は、(量子力学の不確定性原理をもとにして話されていたのだと思いますが)、「分からないということが本質的」という前提に立って、次のような主旨で話されました。

「物質は分子に、分子は原子に、原子は原子核と電子に、原子核は陽子と中性子に、陽子と中性子はクォークという素粒子に、クォークという素粒子はまたサブクォークという素粒子に……と、どんどんその先を尋ねて行って、そうして行き着いた先が、本当に『分かる』ということなのだろうか? 『最小単位は何か』と探ろうとする努力が、今後もし行き詰まりを見せるようなことがあるとするならば、その時には、『最小単位は何か』という、最初の『問いの立て方』がむしろ悪かったのではないか。宇宙、あるいは原子の中身は、そもそも『こうすれば、こうなる』という決定論的な姿をしていないのではないか。そのような『分からない』から再出発することには、むしろ新しい見方の芽が隠されているのではないか」と。

以上のように、山崎先生は、「良い問いを立てること」の重要性を印象深く述べながら、「本当に知るということは、もっと深いことなのだ」ということを、じかにお話くださったのだと思います。

また、会の後で伺った際には、こうも仰っていました。

「問いの立て方が悪いと、あとでどんなに良い計測機や実験設備を持ってきたとしても、その中で堂々巡りして、きりがなくなってしまう。しかし、問いの立て方が良かったとしても、それが早すぎて技術が追いついていないと、結局はその問いがまた埋もれてしまうことになります。もし二十世紀の天才と言われたアインシュタインが十九世紀に生きていたとすれば、果たして同じような仕事ができただろうか、どうか。その時代の道具立てが揃っていることも重要なのです」と。

そのような両義的な反省に立つことが、学校で学ぶことの吸収力を変えるのではないかと考えられました。

以上のように振り返ってみますと、会の前後の内容は、以下のような「問いかけ」だったのではないかと思います。——「知るということは、どのような原動力でなされ、どのような困難に遭いながら成し遂げられていくことなのか。そしてその困難が今後も続くものなのだとすれば、それに向かってどのような態度で臨んで行けばいいのか」と。そのような「知る」ことに対する「ゆらぎ」をもって、山崎先生は、小・中学生たちや、私たち後進の大人たちを励まそうとくださったのだと感じました。そのこと自体に深い意義を覚えました。

最後に、私自身としては、山崎先生が仰った次の言葉が印象的でした。

「振り返ると、誰しも、あの時こうしておけばよかったと思うことがたくさんあります。しかし、それをすべてあの時に戻ってそうしたからといって、それが今となっていいことになっているのか、どうなのかは、結局のところは誰にも判断できないでしょう」と。





会の前半、数学で取り上げた内容は、「倍数の判定法」でした。ある数が2で割り切れると判定するには、どの桁の数に注目すればよいか。またそのような法則は、4や8ではどうか。5ではどうか。さらに、3、6、9の場合ではどうか、という順で考えました。

そして当日、会が終わってから、参加者(保護者)の方に右記の考察をご報告いただきました。この場を借りてご紹介させていただきます。

本日の山崎先生の「割り切れるか?」についての追加考察です。

7で割れるか:

- 1) 1,000,000 ごとに区切って数字を足しあわせていく。
注: ただし、和が7桁を越えた場合には、1)の作業を繰り返す。
- 2) 1001 が7で割れることから、「下3桁」から「上3桁」を引く。
- 3) このMAX3桁の数が7で割れるなら割り切れる。

4で割れるか:

下2桁で判定するのですが、下2桁をまず20で割って(要は10の位を偶奇により0か1にする)、その余りで判定します。

8で割れるか:

下3桁で判定するのですが、下3桁をまず200で割って(要は100の位を偶奇により0か1にする)、さらに40で割って(10の位を0から3にする)その余りで判定します。
(H.Y.さん)

注記) 以下に補足として計算例を示します。

「7で割れるか」の例: 1, 234, 567, 890, 987, 654, 321

→1|234567|890987|654321

→1 + 234, 567 + 890, 987 + 654, 321 = 1, 779, 876

→1 + 779, 876 = 779, 877 (779, 000+877 = 779×1, 001 - 779×1+877)

→877-779 = 98

98は7で割れる。よって、元の数も7で割れる。

(最初の作業は、 10^6 も 10^{12} も 10^{18} もすべて「7で割ると1あまる」法則を利用しています。 $1 \times 10^{18} + 234, 567 \times 10^{12} + 890, 987 \times 10^6 + 654, 321 = 7$ の倍数の塊 + 1 + 234, 567 + 890, 987 + 654, 321)

「8で割り切れるか」の例: 1, 234, 506, 798 (「4で割り切れるか」も同様の流れ)

1, 234, 506, 798 (1, 234, 506×1, 000+798であり、1, 000=125×8より、下3桁だけが問題となります)
→798 →198 →38

38は8で割れない。よって元の数も8で割れない。

(200や40で割ることは、 $200=125 \times 8$ 、 $40=5 \times 8$ を利用して、8の倍数を除くというアイデアです。

これを「棒取り」という遊びにたとえるなら、砂山に立てた棒が倒れない範囲で、できるだけ大きな塊から周りの砂を取っていくような作業です)

月例イベント



『将棋道場』

座主 百木 漠

最近の将棋道場は定員いっぱいになることも多く、将棋に興味をもつ子供たちが増えているように感じます。将棋電王戦(コンピューターとプロ棋士が対決する企画)の開催、パソコンやスマホを使ったオンライン対戦の普及、インターネット上での将棋番組の増加、将棋漫画ブームなど、近年の将棋界は新しい波を迎えつつあるようです。テレビでも将棋好き芸人の特集があったり、将棋好きアイドルが出てきたり、ニュース番組で将棋特集が組まれたりと、将棋に関する話題を見かけることが増えました。

この2月には日本将棋連盟とトヨタ自動車とニコニコ動画の共催で羽生善治四冠王と豊島将之七段が対戦する「車将棋」(人間将棋の車版)が開催されて反響を呼ぶなど、これまでの将棋界ではちょっと考えられなかったようなイベントが続々と実現しています。また3月からは今年の電王戦が始まりますので(こういったかたちでの開催は今年が最後ということで残念な限りですが)、関心ある方はチェックされてみてはいかがでしょうか。

とはいえ、山の学校の将棋道場ではインターネットやスマートフォンの流行などとは関係なく、昔なが



らの駒と盤をつかって、毎回たくさんの子供たちがワイワイと楽しみながら将棋を指しています。その様子は、まだインターネットも携帯電話も普及していなかった僕の子供時代と全く変わることはありません。これだけネット・スマホが全盛の時代にあっても、昔ながらの駒と盤をつかった将棋というゲームの面白さが変わることはないのだと少し感慨深く、しみじみ思ったりしています。

去年から将棋道場に通ってくれるようになった子供たちも、すっかり将棋道場の雰囲気にも慣れ、少しずつ対戦のコツもつかめるようになってきているように感じます。少しずつ全体のレベルも上がってきているようで、教える側としては嬉しいかぎりです。以前から通ってくれている子供たちに早くも実力的に追いつく子もちらほら出てきて、今後はいっそう切磋琢磨の度合いが高まっていくのではないかと期待しています。先日も半年に一回の将棋道場トーナメント大会を開催したのですが、優勝は半年ほど前から通い始めてくれたMiくん（1年生）、準優勝は数ヶ月前から通い始めてくれたNaちゃん（年長）という結果で、将棋道場に通い始めて1年未満の新人（？）の活躍が目立ちました。将棋道場に長く通ってくれているベテラン（？）の上級者たちの巻き返しを期待したいところです。

毎回、将棋道場のはじめには簡単な定跡の解説、終わりには詰将棋の出題、をするようにしています。将棋はいろんな定跡や手筋や寄せのかたちを覚えれば覚えるほど強くなるので、単に対戦を重ねるだけでなく（とはいえやはり対戦が一番大切ですが）、そうしたトレーニングの仕方にも身につけてほしいなと思っています。



● ● ● 山の学校 12周年に寄せて

立命館大学・専門研究員 上尾 真道

まずは山の学校 12周年おめでとうございます。わたしは2008年春から2011年の春まで、三年間のあいだ山の学校で小学生の「かず」や「ことば」、高校生の「英語」「物理」「化学」、大人の方のための「フランス語」などのクラスを担当させていただきました。その後、大学での研究職にすすむため、山の学校を離れることになりましたが、当時、さまざまな年代のひとつとと一緒に、「学び」の根っこにあるものは何かと考えながら取り組んだ授業の経験は、大学で講義を行なうようになったこんにちにも活かしています。

ところで大学といえば近頃はどこも改革の話題で持ちきりで、日本の高等教育もグローバルスタンダードに適応せねばと、鼻息の荒いかけ声がほうぼうで聞かれます。いっぼう、学生たちも決して安穩としておらず、自分の将来、社会の行く末について心配し、なんとか最善の行動を選べるようにと、さまざま知識や情報を集めておくのに必死の様子です。「知識」ということでいえば、インターネットの検索サイトを使えばすぐさまある程度の調べがつく現代、わたしたちはある意味、いつの時代にもまして賢くなったのかもしれませんが、こんな環境にあってわたしはときどき、自分がなんだか、めまぐるしいほどの速さで行き交う知識の渦を眺めて、右往左往しているだけに過ぎないような気がします。知ること、学ぶことはこんなにも忙しないものだったろうかと、ふと思うときがあるのです。

山の学校でのクラスのことを振り返るとき、わたしが思い出すのは、こうした慌しさとは正反対の何かです。たとえば瓜生山の草木のあいだを渡る風の音のこと。あるいは夕日が穏やかに赤く染める教室のこと。静けさに包まれているのだけれど、内側からはふつつと熱気が溢れてくるような空間。そこでは知は、どこにも逃げ出さず、わたしたちをじっと辛抱強く待っていてくれたように思いますし、深く夢中になることを許してくれたように思います。

わたしの人生のなかにこんな温かい学びの思い出があることがなにより嬉しく、山の学校に関わることができたことにほんとうに感謝しています。12年というひとつの節目を超え、これからもいっそうかけがえない学びの場となられることを祈念いたしております。

●(巻頭文続き)ヨーロッパの知的伝統の中に息づいてきた事実は驚嘆に値します。と同時に、彼我の相違を思わずにいられません。すなわち、権威への盲従を当然視する風潮と、権威の言説を徹底的に批判する姿勢は180度異なるでしょう。だからこそ、私たちはあえて異なる価値観(洋魂)を正しく知る必要があるのです。相手を礼賛し己を卑下するという明治風のやり方でなく、己を照らす確かな鏡を持つために、です。やるなら根っこから。やるならラテン語から。これを明治以降日本は怠ったのではないのでしょうか。ラテン語はヨーロッパ社会における漢文です。

前置きが長くなりましたが、私が山の学校設立当初からラテン語を看板に掲げた理由は、まさに今述べた個人的信念によるものです。私は日頃は幼稚園長として、社会の宝というべき子どもたちと接する機会をもちます。その将来を思うとき、学校教育、大学教育に無関心ではられません。今まで、「山の学校のラテン語って何なのだ? 園長の趣味か何かか?」と受け取られてきたかもしれませんが、上で述べたように、(日本における)ラテン語とは子どもたちの未来を明々と照らす「教養教育」の鍵となるものであり、「洋魂」を正

しく理解するための手段というべきものなのです。その学習環境を整えることは、ひいてはわが国の教育と学問の自由を守る道に寄与すると信じますし、同時にそれが世界の未来を照らすものであることを願います。西洋古典学とは畢竟人間の学(フーマニタース)であり、それは常に「普遍」を目指すものだと理解できるからです。

本来は、大学教育の一環としてラテン語を学ぶ環境が用意され、講読クラスも含めての充実が期待されるのですが、日本にはラテン語を学べる大学が数えるほどしかありません。とすれば、後は山の学校のような私塾でやるしかないわけです。あるいは個人で独学する人が一人でも増えることに希望をつなぐのみ。こうしてラテン語を学ぶ人が一人また二人と増えるほど、あちらに一つ、こちらに一つと闇夜に蛍の灯りが広がるイメージを私は抱きます。

山の学校は開校12周年を迎えます。もう12年、まだ12年。私に関していえば、これから幼児教育に軸足を置きながら、草の根の教養教育、とりわけラテン語教育の普及に力を入れていくつもりです。

山の学校代表 山下 太郎

●●● ラテン語のすすめ

「ラテン語は日本人にとって親しみの持てる言語です。発音がローマ字読みで簡単だとか、ビデオ(video)やオーディオ(audio)といったラテン語のつづりは日本人になじみがある、という取っ付きのよさだけでそういうものではありません。欧州の伝統的ラテン語教育のスタイルは、文法を学び、構文を分析し、辞書を引きながら丹念に原典を読み解くというもので、この一連の作業は、(好悪は別として)日本における英語の文法訳読方式を思わせるでしょう。

実際、日本の英語教育は欧州のラテン語教育を手本としてきたかのように見受けられます。生きた英語をラテン語のように学ぶのはけしからん、という意見も耳にしますが、他方で日本人が英語学習を通じ、無意識のうちにラテン語の基本的学習態度を尊重してきた、という歴史的事実にはもっと注目してよいと思います。ラテン語は欧米社会における漢文です。ラテン語を学ぶメリットをいまさら論評するのは野暮というものでしょう。我が国にも漢文訓読教育の長きにわたる立派な伝統があるわけですから、東洋の古典と同じく西洋の古典に対しても相応の関心を抱いてしかるべきです。

前置きが長くなりましたが、私から申し上げたいことはただ一つ。みなさんにとってラテン語を学ぶ下地は十分できているということです。英語学習で培ったノウハウをぜひラテン語学習に生かして下さい。じっくり学べば、ラテン語はきっと「わかる!」、「面白い!」言語だと納得していただけること請け合いです。」

これは『しっかり学ぶ初級ラテン語』(ベレ出版、2013年)の「はじめに」に書いた一文です。この教科書は練習問題に解説と解答をつけ、独習者の便宜をはかっています。今年の4月には同じ出版社からラテン語のトレーニングブックも出ますので、あわせてご活用下さい。山の学校の出張講座として、この教科書を用いた講習会を東京で定期的に開催しています(京都ではキケローの講読を毎月行っています)。関心のある方はお問い合わせ下さい。(山下太郎)



——本誌を手にとって下さった方へ

山の学校は、小学生から大人を対象とした新しい学びの場です。「Disce libens. (楽しく学べ)」がモットーです。中高生のための徹底した少人数指導のクラス、社会人のための語学クラスも充実。子どもは大人のように真剣に、大人は子どものように童心に戻って学びの時を過ごします。

「山びこ通信」は、その様子をお伝えすべく、学期毎に年三回発行しているものです(春学期は6月、秋学期は11月、冬学期は2月)。ホームページでも、クラスの様子やイベント(毎月開催・無料)の情報などを発信しています。学ぶことが楽しくて仕方がない!もし、そうした気持ちを本誌を通し、少しでも皆様と共有することができたとすれば、望外の喜びです。

お申し込み・お問い合わせはこちらまで

TEL: 075-781-3215

FAX: 075-781-6073

E-mail: taro@kitashirakawa.jp

<http://www.kitashirakawa.jp/yama-no-gakko>

